

“I Remember Grandpa”の authorship を考える (2)

—文体上の特徴を手がかりとして—

大 園 弘

はじめに

筆者は前稿において、Capote がコロンの使用を多用する傾向の強い小説家であることに着目し、“I Remember Grandpa” (1985) の authorship を明らかにする第一歩として、“I Remember Grandpa”、同系列の自伝的作品である Capote の “A Christmas Memory” (1956)、“I Remember Grandpa” のタイプ原稿を譲り受けたとされる Marie Rudisill—Capote の叔母—の伝記作品 *Truman Capote: The Story of His Bizarre and Exotic Boyhood by an Aunt Who Helped Raise Him* (1983) の 3 つの作品について、主にコロンの使用頻度と使用パターンの比較を試みた。その結果、これら 3 作品のコロン／セミコロンの使用頻度のみをもって、“I Remember Grandpa” の authorship を判断することはできないこと、また、コロンの使用パターンに関しては、“I Remember Grandpa” および *Truman Capote* と “A Christmas Memory” には大差が認められるために、“I Remember Grandpa” の作者が Capote であるとはみなしがたいという 2 点を指摘した。⁽¹⁾

本稿でも、文体上の特徴を手がかりとして “I Remember Grandpa” の authorship を引き続き考えてみたい。

リーチは「すべての作者、いやすべてのテキストは、それぞれに固有の特徴を備えている」と述べ、散文作品の諸特徴のチェックリストとして、語彙範疇・

文法範疇・文彩・結束性および文脈という4つの区分を提案している。リーチはさらに語彙範疇を1. 全般、2. 名詞、3. 形容詞、4. 動詞、5. 副詞に細分化している。⁽²⁾このうち本稿では、副詞に焦点を絞り“I Remember Grandpa”の authorship を考える。副詞はその他の品詞よりも書き手(話者)の主観や感性が反映されやすい。そのぶん、書き手(話者)の表現(発話)のクセがテキスト固有の特徴として表れやすいと推測できるからである。

本稿では、まず、“I Remember Grandpa”に頻繁に用いられていると感じられる副詞(句)を数値とともに挙げ、それらの副詞(句)の使用頻度を Capote の他の8編の短編小説の場合と比較し、若干の考察を試みる(第Ⅰ節)。さらに、それらの副詞(句)のすべてにおいて、“I Remember Grandpa”、Capote の8短編小説、Rudisill の *Truman Capote* とのあいだで比較し、若干の考察を試みる(第Ⅱ節)。そして最後に、第Ⅱ節でのデータに基づき“I Remember Grandpa”の authorship についての仮説を提示する(結び)。

I “I Remember Grandpa”に頻出する副詞(句)

わずか17頁の“I Remember Grandpa”⁽³⁾を繰り返し読んでみると、幾つかの副詞(句)が浮かびあがるように見えてくる印象を受ける。それらは、“just”、“always”、“sure”(主として動詞を修飾する用法: “He sure helped Grandma, ...”⁽⁴⁾)、“real”(形容詞を修飾する用法: “... she looked real tired.”⁽⁵⁾)、“though”(“He had kept his promise though.”⁽⁶⁾)、“Then/then/And then/and then/but then など”(transition としての用法)の6つの副詞(句)である。〔表1〕は、それぞれの副詞の使用回数をまとめたものである。括弧内の数字は1頁当たりの使用頻度(小数点以下第2位四捨五入)である。

〔表1〕

just	always	sure	real	though	Then など
46回(2.7)	12回(0.7)	6回(0.4)	5回(0.3)	5回(0.3)	15回(0.9)

“just”の使用頻度が際立って高いというのは誰の目にも明らかである。だが、使用回数や使用頻度の見た目の値から受ける印象とは異なり、“just”以外の副詞(句)の使用回数と使用頻度も高めであるということは、Capoteの短編小説の場合と比較してみるとよくわかる。〔表2〕は、Rudisillが“I Remember Grandpa”の原稿を譲り受けたとされる1946年前後に刊行されたCapoteの6つの短編小説と、刊行時期は異なるが“I Remember Grandpa”と同系列の自伝的短編“A Christmas Memory”(1956)、“One Christmas”(1982)における上記6種類の副詞(句)の使用頻度を“I Remember Grandpa”のケースと比較したものである。括弧内の数字は1頁当たりの使用頻度(小数点以下第2位四捨五入)である。

〔表2〕

	just	always	sure	real	though	Then など
“I Remember Grandpa” (1985)	46回(2.7)	12回(0.7)	6回(0.4)	5回(0.3)	5回(0.3)	15回(0.9)
“Jug of Silver” (1945)	9回(0.6)	5回(0.3)	0回(0)	2回(0.1)	0回(0)	11回(0.7)
“Miriam” (1945)	4回(0.3)	1回(0.1)	0回(0)	0回(0)	0回(0)	7回(0.5)
“My Side of the Matter” (1945)	13回(1.2)	1回(0.1)	0回(0)	2回(0.2)	1回(0.1)	4回(0.4)
“Preacher’s Legend” (1945)	5回(0.4)	0回(0)	1回(0.1)	0回(0)	0回(0)	7回(0.5)
“A Tree of Night” (1945)	6回(0.5)	5回(0.4)	1回(0.1)	0回(0)	0回(0)	3回(0.2)
“Headless Hawk” (1946)	8回(0.3)	4回(0.2)	0回(0)	0回(0)	2回(0.1)	19回(0.7)
“A Christmas Memory” (1956)	6回(0.5)	10回(0.8)	0回(0)	0回(0)	0回(0)	2回(0.2)
“One Christmas” (1982)	11回(1.0)	4回(0.4)	1回(0.1)	0回(0)	0回(0)	5回(0.5)

〔表2〕を鳥瞰すると、あらためて“I Remember Grandpa”における“just”以下6つの副詞(句)の使用頻度と、その他8短編の場合の使用頻度に明確な差があることがわかる。“I Remember Grandpa”の使用頻度を上回っているのは、わずかに“A Christmas Memory”の“always”のみである。なお、6つの副詞(句)のうち、“I Remember Grandpa”とその他の8短編の差がもっとも少ないのは「“Then” など」の項であるが、それはこの語句の、文頭に位置する「連結詞(connector)」としての用法が、書き手(作家)や作品の違いとは無関係に、ストーリーの展開上、きわめて一般的に用いられるものであるため

であろう。

ところで、本稿で考察の対象とした6つの副詞(句)は、当然のことながら、テキスト内では地の文での使用と登場人物の発話での使用に二分できる。登場人物の発話は、厳密な意味では、物語の書き手(作者)のものとは区別されるべきであろう。他方、地の文は、文字どおり書き手自身のことは、すなわち、書き手の発話のクセもしくは発話のパターンを表している。この観点から、〔表2〕を地の文での使用に限ってまとめ直したものが〔表3〕である。括弧内の数字は1頁当たりの使用頻度(小数点以下第2位四捨五入)である。〔表2〕との比較を容易にするため、〔表2〕と併記する。

〔表2〕

	just	always	sure	real	though	Then など
“I Remember Grandpa” (1985)	46回(2.7)	12回(0.7)	6回(0.4)	5回(0.3)	5回(0.3)	15回(0.9)
“Jug of Silver” (1945)	9回(0.6)	5回(0.3)	0回(0)	2回(0.1)	0回(0)	11回(0.7)
“Miriam” (1945)	4回(0.3)	1回(0.1)	0回(0)	0回(0)	0回(0)	7回(0.5)
“My Side of the Matter” (1945)	13回(1.2)	1回(0.1)	0回(0)	2回(0.2)	1回(0.1)	4回(0.4)
“Preacher’s Legend” (1945)	5回(0.4)	0回(0)	1回(0.1)	0回(0)	0回(0)	7回(0.5)
“A Tree of Night” (1945)	6回(0.5)	5回(0.4)	1回(0.1)	0回(0)	0回(0)	3回(0.2)
“Headless Hawk” (1946)	8回(0.3)	4回(0.2)	0回(0)	0回(0)	2回(0.1)	19回(0.7)
“A Christmas Memory” (1956)	6回(0.5)	10回(0.8)	0回(0)	0回(0)	0回(0)	2回(0.2)
“One Christmas” (1982)	11回(1.0)	4回(0.4)	1回(0.1)	0回(0)	0回(0)	5回(0.5)

〔表3〕

	just	always	sure	real	though	Then など
“I Remember Grandpa” (1985)	39回(2.3)	11回(0.6)	2回(0.5)	5回(0.3)	5回(0.3)	15回(0.9)
“Jug of Silver” (1945)	6回(0.4)	5回(0.3)	0回(0)	2回(0.1)	0回(0)	7回(0.4)
“Miriam” (1945)	0回(0)	1回(0.1)	0回(0)	0回(0)	0回(0)	7回(0.5)
“My Side of the Matter” (1945)	9回(0.8)	1回(0.1)	0回(0)	2回(0.2)	1回(0.1)	4回(0.4)
“Preacher’s Legend” (1945)	2回(0.2)	0回(0)	0回(0)	0回(0)	0回(0)	7回(0.5)
“A Tree of Night” (1945)	0回(0)	1回(0.1)	0回(0)	0回(0)	0回(0)	2回(0.2)
“Headless Hawk” (1946)	4回(0.2)	4回(0.2)	0回(0)	0回(0)	2回(0.1)	19回(0.7)
“A Christmas Memory” (1956)	4回(0.3)	7回(0.5)	0回(0)	0回(0)	0回(0)	2回(0.2)
“One Christmas” (1982)	7回(0.6)	4回(0.4)	0回(0)	0回(0)	0回(0)	5回(0.5)

〔表3〕に明らかなおと、地の文に限ってみても、6つの副詞(句)ともに“I Remember Grandpa” とその他の8短編とのあいだには有意差が認められる。

以上のことから判断する限りでは、“I Remember Grandpa” の作者(authorship)がCapote 本人であると考えるのは難しいと言わざるをえない。

II Rudisill 著 *Truman Capote* との比較

“I Remember Grandpa” の作者(authorship)が仮に Capote 本人ではないとすれば、この物語の原稿を譲り受けたとされる叔母の Marie Rudisill による何らかの関与が疑われるであろう。Rudisill の関与の有無を確認するためには、彼女が著した *Truman Capote: The Story of His Bizarre and Exotic Boyhood by an Aunt Who Helped Raise Him* に前節で考察対象とした6つの副詞(句)がどの程度用いられているかを確認し、“I Remember Grandpa” およびその他の8短編のケースと比較する以外に方法はないと思われる。

〔表4〕は〔表2〕に *Truman Capote* における6つの副詞(句)の数値を組み込んだものであり、地の文と著者(Marie Rudisill)以外の人物の発話を区別

〔表4〕

	just	always	sure	real	though	Then など
“I Remember Grandpa” (1985)	46回 (2.7)	12回 (0.7)	6回 (0.4)	5回 (0.3)	5回 (0.3)	15回 (0.9)
<i>Truman Capote</i> (1983)	177回 (0.9)	177回 (0.9)	1回 (0)	4回 (0)	0回 (0)	143回 (0.7)
“Jug of Silver” (1945)	9回 (0.6)	5回 (0.3)	0回 (0)	2回 (0.1)	0回 (0)	11回 (0.7)
“Miriam” (1945)	4回 (0.3)	1回 (0.1)	0回 (0)	0回 (0)	0回 (0)	7回 (0.5)
“My Side of the Matter” (1945)	13回 (1.2)	1回 (0.1)	0回 (0)	2回 (0.2)	1回 (0.1)	4回 (0.4)
“Preacher’s Legend” (1945)	5回 (0.4)	0回 (0)	1回 (0.1)	0回 (0)	0回 (0)	7回 (0.5)
“A Tree of Night” (1945)	6回 (0.5)	5回 (0.4)	1回 (0.1)	0回 (0)	0回 (0)	3回 (0.2)
“Headless Hawk” (1946)	8回 (0.3)	4回 (0.2)	0回 (0)	0回 (0)	2回 (0.1)	19回 (0.7)
“A Christmas Memory” (1956)	6回 (0.5)	10回 (0.8)	0回 (0)	0回 (0)	0回 (0)	2回 (0.2)
“One Christmas” (1982)	11回 (1.0)	4回 (0.4)	1回 (0.1)	0回 (0)	0回 (0)	5回 (0.5)

〔表 5〕

	just	always	sure	real	though	Then など
“I Remember Grandpa” (1985)	39回 (2. 3)	11回 (0. 6)	2 回 (0. 5)	5 回 (0. 3)	5 回 (0. 3)	15回 (0. 9)
<i>Truman Capote</i> (1983)	61回 (0. 3)	162回 (0. 8)	0 回 (0)	0 回 (0)	0 回 (0)	119回 (0. 6)
“Jug of Silver” (1945)	6 回 (0. 4)	5 回 (0. 3)	0 回 (0)	2 回 (0. 1)	0 回 (0)	7 回 (0. 4)
“Miriam” (1945)	0 回 (0)	1 回 (0. 1)	0 回 (0)	0 回 (0)	0 回 (0)	7 回 (0. 5)
“My Side of the Matter” (1945)	9 回 (0. 8)	1 回 (0. 1)	0 回 (0)	2 回 (0. 2)	1 回 (0. 1)	4 回 (0. 4)
“Preacher’s Legend” (1945)	2 回 (0. 2)	0 回 (0)	0 回 (0)	0 回 (0)	0 回 (0)	7 回 (0. 5)
“A Tree of Night” (1945)	0 回 (0)	1 回 (0. 1)	0 回 (0)	0 回 (0)	0 回 (0)	2 回 (0. 2)
“Headless Hawk” (1946)	4 回 (0. 2)	4 回 (0. 2)	0 回 (0)	0 回 (0)	2 回 (0. 1)	19回 (0. 7)
“A Christmas Memory” (1956)	4 回 (0. 3)	7 回 (0. 5)	0 回 (0)	0 回 (0)	0 回 (0)	2 回 (0. 2)
“One Christmas” (1982)	7 回 (0. 6)	4 回 (0. 4)	0 回 (0)	0 回 (0)	0 回 (0)	5 回 (0. 5)

しない数値(使用回数および1頁当たりの使用頻度：小数点以下第2位四捨五入)となっている。〔表5〕は〔表3〕に *Truman Capote* における6つの副詞(句)の数値を組み込んだものであり、地の文のみの使用回数と使用頻度を記したものである。

〔表4〕および〔表5〕の重要な観点は、*Truman Capote* における6つの副詞(句)の使用頻度が “I Remember Grandpa” 寄りであるか、その他の8短編寄りか、という視点である。それが仮に “I Remember Grandpa” 寄りであれば、Rudisill の “I Remember Grandpa” への関与が疑われるであろうし、また仮にそのような特徴が顕著に認められないとすれば、彼女が関与したという推測は退けられなければならない。

このような観点から〔表4〕・〔表5〕に掲げた数値を俯瞰してわかることは、次の3点である。⁽⁷⁾

- (1) “just” の使用頻度に関しては、“I Remember Grandpa” において1頁当たり2.7回(地の文での使用頻度は2.3回)と極めて高いのに対して、*Truman Capote* では1頁当たり0.9回(同0.3回)と比較的低めである。後者の数値はむしろ Capote の8つの短編が示す数値により近い。

- (2) “always” の使用頻度においては、全使用回数、地の文での使用頻度ともに *Truman Capote* が “I Remember Grandpa”、Capote の 8 つの短編のいずれをも上回っているが、もともと、“I Remember Grandpa” と 8 つの短編とのあいだに “always” の使用頻度の点で有意差があるわけではなく、*Truman Capote*、“I Remember Grandpa”、8 つの短編における “always” が示す数値から何らかの意味を見出すのは難しい。
- (3) “sure”、“real”、“though” の使用頻度については、*Truman Capote* と 8 つの短編が示す数値はほぼ等しく、これらと “I Remember Grandpa” が示す数値とのあいだには有意差が認められる。

以上の 3 点から総合的に判断する限りでは、*Truman Capote* の著者 Rudisill が “I Remember Grandpa” に関与していたという推測は成り立ちがたい。

結 び

以上みてきたように、“I Remember Grandpa” に特徴的に見られる 6 つの副詞(句)の使用頻度を、この物語が書かれたとされる同時期に発表された Capote の 6 短編小説やこの物語と同系列の自伝的短編 2 作品のケースと比較すると、そこには明らかに有意差が認められる。つまり、“I Remember Grandpa” を Capote 作であるとする見方は疑問視せざるをえない(第 I 節)。しかしその一方で、同じくそれら 6 つの副詞(句)の使用頻度を、Mary Rudisill 著 *Truman Capote* のケースと比較してみると、両者間にはやはり同様の有意差が認められ、これにより Rudisill が “I Remember Grandpa” に関与した、もしくは彼女がこの物語の作者であるとする見方にも無理がある(第 II 節)。

筆者は前稿で、主にコロンの使用パターンを判断の基準として、“I Remember Grandpa”、*Truman Capote*、“I Remember Grandpa” と同系列の自伝的短編小説 “A Christmas Memory” の 3 作品を相互に比較し、“I Remember

Grandpa” を Capote 作とみなすのは難しいとの結論に達した。本稿ではさらに 6 種類の副詞(句)について、“I Remember Grandpa”、*Truman Capote*、Capote の 8 短編小説を相互に比較した。その結果、上述のとおり、Rudisill が “I Remember Grandpa” の作者であるとみなすこともまたできないということがわかった。

前稿および本稿で得た段階的結論から導き出すことのできる仮説は以下のとおりである。

前稿でも引用したように、Capote は晩年、自らの小説の文体が初期のころからそれほど変わっていないと明言している。⁽⁸⁾もしこの発言が Capote の偽らざる本心であるとすれば、Capote は “I Remember Grandpa” を書き上げたものの、その文体に納得がいかなかった可能性が考えられる。本稿で採りあげた 6 つの副詞(句)をめぐって、“I Remember Grandpa” と Capote の 8 短編小説とのあいだに見られる使用頻度の格差は、そのことを物語っているように筆者には感じられる。Capote にとって “I Remember Grandpa” は出版社や雑誌社に原稿を持ち込むほど満足のいく出来栄えの作品ではなく、結果として叔母 Rudisill が譲り受けることになったのであろう。

注

- (1) 大園 弘「“I Remember Grandpa” の authorship を考える (1)—文体上の特徴を手がかりとして—」『教養研究』第25巻第1号、九州国際大学教養学会、2018. pp. 35-45. 参照。
- (2) リーチ、G.N. ・ショート、M.H.『小説の文体—英米小説への言語学的アプローチ』石川慎一郎・瀬良晴子・廣野由美子訳 研究社、2003. pp. 10-12. 参照。
- (3) “I Remember Grandpa” は37頁構成であるが、挿絵の頁(18頁)を除いた英文テキスト(19頁)を、本稿で採りあげた Capote の 8 短編が収録された *The Complete Stories of Truman Capote* (New York: Vintage Books, 2004.) の頁構成に換算すると、凡そ17頁となる。
- (4) カポーティ、トルーマン “I Remember Grandpa.” Atlanta: Peachtree Publishers,

1985. p. 5.

(5) 同書、p. 13.

(6) 同書、p. 34.

(7) 「Then など」については、先述のとおりである。

(8) グローベル、ローレンス *Conversations with Capote*. New York: New American Library, 1985. pp. 49-50. 参照。

謝辞

本稿のデータ作成に際しては、九州国際大学現代ビジネス学部国際社会学科
2年の増田凜さんの協力を得たことをここに記し、同氏に謝意を表したい。

